島根大学教育学部紀要（教育科学）第36巻　37頁～42頁　平成14年12月

脳外傷を抱える学生との関わり

山本大介*・猪野郁子**

Daisuke YAMAMOTO* and Ikuko INO**

A Case Report of the Student who has Brain Injury

［キーワード：外傷，出会い，物語］

Ⅰ．はじめに

私はこの小論で，脳外傷を抱えたある学生とその家族との２年間の関わりを振り返って考えてみたいと思う。

脳外傷とは，交通事故等により頭部に強い衝撃を受けることで脳組織が損傷し，脳の機能が部分的に損なわれた状態を言う。身体機能障害，認知機能障害，行動障害など，障害の内容や程度は様々であるが，なかでも認知機能障害は，外見から窺い知ることが難しいだけに，本人や家族，周囲の者たちに深い困惑をもたらす。私が出会った学生（以後，「彼」と呼ぶ）の場合も，まさにそうであった。

私は，彼や彼の家族の歩みに，ごく僅か，ごく短時間，添っただけなので，知らないことやわからないことのほうが多いが，自分に可能な範囲でその軌跡を描き記すことが，彼らとの「出会い」を経験した者としての責務だと思う。

Ⅱ．事　例

彼は，大学３回生のある夏の日の朝，部活の早朝練習のためオートバイで山道を急いでいた。カーブに差し掛かったとき対向車を避けようとして転倒，脳挫傷，左肺損傷，左肩骨折という重症を負い，意識不明のまま生死の境を彷徨った。幸いにも一命をとりとめ，約10日あまりで意識も回復，3ヵ月の入院生活の後，郷里の病院に転院し，そこで更に2ヶ月を過ごし，その年の暮れにようやく退院となった。

しかしそれは，「脳外傷」という重い課題を背負っての退院であった。

彼の場合，認知機能の障害が顕著だった。過去の記憶はある程度思い出せたが，リハビリの担当者の名前や昨日の出来事，つい今しがた話したことなど，新しい事柄についてはほとんど思い出せなかった（記憶障害）。自分から自発的に行動を起こすことは希で，一日の大半を自宅で無為にすごしがち，何か問い掛けても「わかりません」と即答するのみで自分で考えようとする意欲に欠けていた（自発性の障害）。与えられた課題を適切に処理し解決するということも困難だった（問題解決能力の障害）。

本人の努力，家族や病院でリハビリを担当していた専門職員の地道な支援により，認知障害は徐々に改善傾向を見せ始めた。自分で自転車に乗り書店へ出掛けたり，電車にのって遠出したりするようになってきた。また，病院でのリハビリ場面でも，少人数のグループの中で皆とゲームをしたり，いろいろな課題を遂行したりすることがスムーズとなり，積極的に物事を考えるという姿勢が見られるようになってきた。ただ，そうは言っても，依然として，外出時に自転車を止めた場所が思い出せなくなったり，自宅へ戻る道がわからなくなったりして，夜中まで街を彷徨い歩いたりすることが時に認められるなど，認知機能の障害は彼の暮らしに支障を及ぼしていた。

そういう暮らしの中で，「もう一度，大学に戻りたい」という言葉が彼の口から語られるようになり始めた。その希望は徐々に大きく強いものとなり，重い存在感を示すようになってきた。彼と家族とのあいだで何度も話し合いが持たれ，その結果，事故にあって２年９ヶ月ぶりに，彼は大学に復学することとなった。しかし，彼ひとりだけでは日常生活をおくることは難しい状況だったので，母親が彼と同じ下宿に間借りしての再スタートとな

*島根大学保健管理センター
**島根大学教育学部家政教育研究室

った。

彼や彼の家族と私との関係が始まったのも，そのときからだった。担当教官から「脳外傷という大変な問題を抱えている学生さんが復学してこられるので，力を貸してもらえませんか」と頼まれたのがきっかけだった。

私は，脳外傷を抱えた人に会うのは初めてだったし，そもそも，当時は脳外傷という言葉すら私は知らなかったので，どういう援助をしてあげたらいいのか全くわからなかった。でも，彼の母親の「どこまでやれるかはわからないけれど，『やれるところまでやってみたい』という本人の気持ちを尊重してあげたい。それをしないことにはこれからの一歩を踏み出せないと思うんです」という言葉を聞いて，とにかく私も彼や母親に会ってゆこう，どのような援助を自分が行いうるのかということを模索しつつ会ってゆこうと決めた。

彼は一見するだけでは障害のある人とは思えなかった。あらかじめ私に知らされていた「重い障害を抱えている学生さん」という事実と，目の前にいる彼の明るく，軽快な，どこかふわふわとした平穏さが，不思議なアンバランスの感覚を引き起こした。

私の問い掛けに対しては彼は普通に応じ，チグハグな返答をすることもなかったが，よく考えないで「はい」と即答したり，とりあえずその場に合わせるような返答をしてしまう傾向があった。

しかし徐々に彼の深刻な障害の状況が明らかとなり始めた。

彼は記憶の補助手段としてメモ帳を携帯していたが，肝心の「メモをとる」ということや，「メモ帳を見る」ということを忘れがちであった。

忘れると言っても，彼は，私の名前はすぐに覚えることができたし，何かを想起する場合も正しい手がかりを与えると思い出せることが多いことから，彼の場合は記憶の入力や貯蔵の問題よりも，思い出すときにうまく手がかりが使えないという記憶の検索の問題が大きいのではないかと考えられた。何かを思い出そうとすると，似たような情緒を伴った別の記憶が手繰り寄せられてしまうということもそれを裏付けた。

日課表を見間違えて別の教室へ行ってしまう，時刻表を見間違えて別のバスに乗ってしまう，コンピュータの表計算が理解できない，という問題もあった。表を読む，つまり，「行」と「列」を交差させて読むということが適切にできなかったのである。表を読むというのは一見簡単に思えるが，実は，目的のセルを見つけるには，そのセルが所属する「行」に注意を集中させつつ（それ以外の「行」には注意を低下させつつ），同時に，そのセルが所属する「列」にも注意を集中させつつ（それ以外の「列」には注意を低下させつつ），２つの，別々に集中させた注意が交差する部分を見出すという，かなり複雑な作業を瞬間的にこなさねばならない。彼の場合，他の刺激より優先して特定の刺激に注意を向けることや，複数の刺激に同時に注意を向けるといった「注意の障害」があって，そのため表を読むという作業がうまくできないようだった。

自転車置き場で，たくさんの似たような自転車の中から，自分の自転車を探し出すことができない，靴を脱ぎ忘れて土足厳禁の建物にあがってしまう，コンピュータの電源スイッチの入れ方がわからない（コンピュータ本体が机の下にあり，通常の位置からはスイッチが見えない）といった事柄も，記憶や注意といった認知機能の障害によるものと考えられた。

時間感覚のズレという問題もあった。話をし始めて数分ほどしか経過していないにも関わらず，彼は「もう３時間ぐらい経ったでしょう」と言った。私が正しい時間を告げると彼は驚いた。記憶障害のため数分前の記憶があたかも数時間前の記憶であるかのように急速に古ぼけてしまうからかもしれないし，あるいは，もしくは同時に，覚醒水準の低下といった問題があるためかもしれなかった。

根が続かないという問題も明らかに認められ，学習場面や，その他の場面で無視できない影響が現れた。

「当」「ヨ」という文字をどうしても左右逆に書いてしまうという問題もあった。

身体的なコンディションとしては，睡眠時間が短く活動性の高い時期と，睡眠時間が長く活動性の低い時期とが周期的に訪れるということや，スケジュールが変わると調子が乱れたり，月曜日の調子が今ひとつだったり，ということが見られた。復学当初の，ストレスの多い時期には，時折，夜尿も認められた。

特異的な問題として，彼は自分の身体や口腔内を触れられたり，注射されることを反射的に拒絶して，瞬間的に身体を反らしたり，手を引っ込めたりしてしまうため，歯科治療や採血などが容易くは行えないということがあった。その理由は，あくまでも推測の域を出ないが，事故直後，集中治療室で気管内送管をされたり，頻回に注射をされたりという苦痛な体験が，彼の身体に強く刻み込まれていたということがあるのかもしれない。

以上のように様々な障害が複雑に絡まりあう状況の中で彼と母親は二人三脚で頑張った。

彼は，毎日，新聞の「天声人語」を書き写したり，テレビで流れる言葉を辞書で確認したりと，彼自身が地道

な努力を積み重ねたことは言うまでもないが，彼の母親の努力もそれに勝るとも劣らないくらいのものであった。

母親は彼の生活に寄り添い直接的に援助すると共に，彼の行動をつぶさに観察し，それを記録し，彼の障害の内容や程度を丁寧に細かく理解しようとした。私との面談の際にはその記録ノートを皆で一緒に見ながら検討した。そういう母親の努力のおかげで，彼の障害をフォローするための具体的な工夫がいろいろと生み出された。たとえば，アラーム付きの時計を彼に装着させ，一定時刻にアラームが鳴るようセットし，それが鳴ったらメモ帳を見るというパターンを彼に身に付けさせることで，メモ帳を見るという習慣を定着させることができた。また，一日毎の日課表をつくる，つまり，「行」だけに注意を払えばよいという日課表をつくることで，表を読むことが困難という彼の弱点がある程度カバーできるようになった。母親は，彼をすっかり依存させてしまうことのないよう，上手に間合いをとりながら，彼自らの課題解決能力が高まるよう，辛抱強く彼をサポートした。

私が直接会っていたのは彼と母親だけだったが，郷里では，父親が不自由で孤独な単身生活に耐えながら，経済的・心理的な支援を一貫して提供し続けた。彼の兄弟も，おそらく様々な我慢を強いられ，言うに言えない思いも募っていたであろうが，静かに暖かく見守ってくれた。

復学後４～６ヶ月を過ぎた頃より，先述したような認知機能の障害に伴う諸問題が徐々に改善し始め，身の回りのことが自分である程度こなせるようになってきた。それにつれて，彼の表情や態度に落ち着きが出はじめ，足が地についたような雰囲気が感じられるようになってきた。私と会った際も，自分の方からよく話をするようになり，表現も豊かになってきた。

そして次第に，情緒的な葛藤が表に現れるようになり始めた。うまく出来なかったり失敗したことを母親に触れられると「ムカつく」ようになり，イライラして怒鳴ったりするということが時折認められるようになり始めた。認知機能が改善される，あるいは，認知機能が適切にカバーされるようになれば，事実が正しく認知されるようになるわけだから，必然的に，自分自身のことや，自分の置かれている現状も正しく理解されてくるだろう。それは彼にとって幸せでもあり不幸せでもあろう。事実を知ることには悲しみが伴うから。

復学して１年目が終わったとき，当初より改善しているとは言え，まだまだ十分ではない彼の姿を見て，両親は「大学に行くことに本当に意味があるのか」と迷った。しかし彼の意志は「自分としては大学生活をやり遂げてケリをつけたい」と固く，話し合いの結果，どうなるかはわからないがもう1年やってみて結論を出すということになった。

２年目も前年度と同じく，彼と家族は一喜一憂しながら頑張った。担当教官をはじめ，その他の教官の助力もあって彼は単位を積み重ねて行った。

ところが，一番最後の課題である卒業論文が，大きな壁となって立ちはだかった。

多くの資料を読んで，自分で考えて，それらをまとめて，構成して，論文というかたちに仕上げる，という作業は，彼にとっては著しく困難なものであった。

担当教官も彼や家族の苦労を傍で見て知っているだけに，ずいぶんと悩んだ。「何とか卒業させてあげたい。でも，そのためには自分が殆ど手を貸してあげないといけない。そしたら，その論文は彼が書いたものではなくなる。そうしてまで卒業させてあげることが本当に彼のためになるのだろうか」。そして悩んだ末に出された結論は，「そういうことはしてはならない。厳しいけれども現実は現実として受け止めてもらうことこそが大切である」，ということだった。

彼は復学して２年間過ごしたのち退学することとなった。

郷里に引き上げる前，彼と母親が私に会いに来てくれた。

彼も母親も爽やかな笑顔だった。

彼は「気持ちは卒業しました。悔いはないです」と言った。母親も「本人も家族も精一杯やれるだけのことはやりました。だから，もう悔いはありません」と言った。そして郷里でも脳外傷の友の会を立ち上げることになったという話をしてくれた。

私は彼と母親に「紙でできた卒業証書はなくても，心の卒業証書はちゃんと手にすることができたんですね」という言葉を贈った。

彼の大学生活は大学３年のあの事故の日に突然プツンと途切れてしまった。彼の大学生活という物語は未完のまま，そこで放置されてしまった。だから彼はどうしてもその物語を最後まで書き終えねばならなかった。できればハッピーエンドが良いけれど，それが無理でも，とにかく最後まで書き終えるという作業が必要だった。そうしないと先へ進めなかった。先へ進むには，きちんと終わるという心の作業が必要だった。

私が彼と母親に最初に会ったとき，母親が言った「どこまでやれるかはわからないけれど，『やれるところまでやってみたい』という本人の気持ちを尊重してあげた

い。それをしないことにはこれからの一歩を踏み出せないと思うんです」という言葉は，まさにそういうことであった。

故郷に戻った彼は，自分で生計をたてることを目指し，職業訓練のリハビリを始めた。アルバイトも始めた。家族は脳外傷の友の会を立ち上げ，本人やその家族が互いに支え合い，学び，家族や社会での問題解決の道を探るための活動を始めた。もちろん彼もその活動に加わったことは言うまでもない。

Ⅲ．考　察

以上，駆け足で振り返ってみたが，彼が様々な困難を乗り越え，自分の人生に自分でけじめをつけて，新たな一歩を踏み出すという作業を支えた要因を幾つかの視点にわけて考えてみたい。

本人による支え

彼はもともと根性があった。脳外傷による認知機能の障害に覆われてはいたが，彼の根っこは地面の奥深くで静かに生き続けていたのではないかと思う。

この「本人自身が本人を支える」ということがなければ，いくら周囲の者が献身的に努力したとしても，悲しい徒労に終わることが多い。

身体の病気を例にとると，たとえば，白血病の治療では癌化した異常な血液細胞を退治するため抗がん剤を多量に投与するが，その副作用として正常な血液細胞も破壊される。とくに正常な白血球が減少することによって，敗血症などの重篤な感染症を生じる。その場合は強力な抗生物質を多量に投与して治療を行うが，正常な白血球が極端に減少してゼロに近くなっている場合には，いかなる抗生物質を使っても症状はなかなか改善しない。ところが，正常な白血球が少しでも増加しはじめると，とたんに抗生物質が効果を示し始め，症状は改善へ向かって加速度的に動き出す。如何に優れた抗生物質でも，生体自身の防御能力なしでは効果は十分には発揮しえない。

本人の中にある「自分で自分を支える力」というものが元気であるということは，何にも代え難い資質だと思う。

家族による支え

この大きな作業は決して彼ひとりでは成し得ず，家族あっての彼であったことは言うまでもない。

あの夏の日の事故の瞬間から，彼の人生は大きく変わったが，彼の家族の人生も大きく変わったであろう。すべてではないにしろ，家族の重心・関心のかなりの部分が彼によって占められたであろう。彼以外の家族の苦悩や葛藤の多くはその影に隠れ，ひそやかに耐え忍ばれるしかなかっただろうし，ときに波風を立てたとしても，すぐに治めざるを得なかったであろう。彼も苦悩しただろうが，家族も苦悩したと思う。そういう状況の中で，彼の家族はチームワークを保ちながら彼の支援を続けた。

私たちにとって家族はかけがえのないものであり，切っても切り離すことのできない深い絆で結びついている。家族が自分を応援してくれるということが，どれほど私たちを元気づけてくれることか。もちろん，世の中には，彼のように家族に恵まれた人ばかりではない。こちらの胸がつぶれそうになるほどの悲しみを抱えた家族の中で暮らしている人もある。しかし，そういう不幸せな家族であったとしても，家族による支えに勝るものはないと思う。

信仰による支え

実は彼も家族も敬虔なクリスチャンだった。私はこの２年間の関わりを通して，自らが主体的に信仰を選び取り，その信仰をまさに今，生きているという人々の姿を見た。

だから本当は，この小論においても，信仰というものを中心に置いて振り返るべきだろうし，彼や家族もそうしてほしいのではないかと思う。でも，クリスチャンでない私には，それを十分に語れるだけの言葉がないので，敢えて背景に忍ばせるに留めた。

友人・知人による支え

彼の同級生，下宿仲間，部活の仲間が彼の復学を祝福した。遠くからたびたび会いに来てくれた人もあった。くじけそうになった彼や母親を励ましたり慰めたりしてくれたりもした。行きつけの喫茶店の方々やトレーニングジムの店長さん，そして，もちろん，教会の人々も，大事なサポーターであった。

私たちは，日常生活の中でたくさんの普通の人々に抱えられて生活している。「非専門家による抱えの関係」（神田橋，1990）というのは地味で目立たないが，確かな支えである。

教官による支え

担当教官は彼の復学の窓口となり，私との出会いをマネージメントし，復学後も一貫して彼と家族を応援し続けた。脳外傷についての新聞記事を見つけ，家族会等に

ついての情報を調べてくれたのも担当教官だった。その他の教官も，彼が単位を取得してゆくうえで，様々な助力を提供してくれた。何にもまして，彼の卒業を巡っては，真に彼の人生を想っての決断を下してくれた。

より深い知識や技術あるいは豊かな教養というものを身につけさせるのも大学教育の大きな役割であろうが，ひとりの人間が自分の人生を自分のものとして生きてゆけるよう力を添えてあげるということも大きな役割だろう。そういう意味では，教官が行ったことは，すぐれて教育的な実践であったと思う。

専門家による支え

彼は脳外傷の後遺症としてのてんかん発作があったため，定期的に病院に通院し，抗てんかん薬を服用していた。彼にとって医療機関というのは，あまり縁を持ちたくない，できれば忘れてしまいたい場所かもしれないが，やはり，必要不可欠なものであった。

また，私の勤務する保健管理センターは，彼や母親が少し立ち寄り，少し羽根を休め，少し自分の姿を点検して，また飛び立ってゆく，そういう場所として，ある程度は役に立ててもらえたかもしれない。

私個人の対応に関して言えば，脳外傷については素人なので，良質で具体的な専門的援助を提供できたとは思わない。むしろ私が行ったことは，労ったり，慰めたり，励ましたりといった普通の人が普通に行う常識的な応援活動であった。

いわゆる「専門家」と称される者たちは，自分の無知や無力感に居直ることなく，専門的知識・技術の習得に向けて日々精進を積まねばならないが，ただその過程で，専門家が行う専門的な援助活動こそがもっとも効果的で最善のことであるかのような錯覚にとらわれることが多々ある。しかし，今回，彼との関わりをこうして振り返って明らかとなったように，専門家が行う援助，行いうる援助というのは，ごくごく僅かなことであるのだから，それを忘れないよう自戒したい。

すぐれた雨乞い師は，自分が雨を降らせるわけではないと言う。自分はただ，風の音に目を凝らし，太陽の光に耳を澄ませながら，そこに居るだけだと言う。おそらく，それが，援助者としての理想形なのであろう。

Ⅳ．おわりに

彼は郷里に戻ってから２年後，急逝した。

彼はフルートが上手で私にもよく演奏を聞かせてくれていたが，その日も大好きなクラシックコンサートに出掛けた。帰宅後，突然，体調の不良を訴え，救急車で病院に搬送されたが，そのまま帰らぬ人となった。

私は家族からの連絡を受け，彼の葬儀にかけつけた。

悲嘆に暮れ，言葉を失っている私に，彼の両親は「彼は本当は７年前に神様のもとへ召されていたのです。でも神様が彼や私たちに７年間という時間を与えてくださったのです」と言ってくれた。私は頭をたれるばかりだった。

私たちは，自分の夢や希望，目標に向かって頑張る。それらを何とか実現させようと思って頑張る。頑張って実現することもあれば，そうならないこともある。努力すれば必ず実現できるというものではない。この世の出来事は，自分の努力によって何とかなる部分はほんのわずかで，それ以外の大部分は自分の努力の外にある。

私たちは，夢や希望がかなったり，目標が達成できると嬉しいし，幸せだと思う。そうならないときは，悲しいし，不幸せだと思う。

しかし，自分の夢や希望がかなったり，目標が達成できることと，自分らしく暮らすということとは，別物だと思う。自分の夢や希望や目標が実現したからといって，それが即，自分らしく暮らすということになるとは限らないし，逆に，自分の夢や希望や目標が実現されなかったとしても，自分らしく暮らすことはできるのではないかと思う。

彼の場合も，ある日突然，交通事故に遭ったがために，元気な頃に懐いていた願いは，すべて達成不可能になってしまった。しかも，若くしてその命すらも失ってしまった。

しかし，彼は，最後まで，自分らしく暮らしたのではないか，と私は信じる。

挫折，事故，病気……，どうなっても，何が起こっても，自分は自分。自分が自分であることに変わりはない。喜んでいる自分，哀しんでいる自分，虚無感に打ちひしがれている自分，呆然としている自分，自分がないと彷徨っている自分，堕落した自分，絶望した自分，どんな自分であったとしても確かに自分である。

自分という存在は，あとにも先にも，たった1回きりだし，自分が存在しているということ自体が既に貴重である。

私たちは自分という物語を日々紡ぎながらその自分という物語を生きている。それは自分にしか綴ることのできない大事な物語である。

私も自分の物語を大事にしてゆきたいし，他者の人生に深く関与する職業に就いている者として，他者の物語を丁寧に聞き取り，心に書き留めてゆきたいと思う。

この小論を書くにあたっては，彼のことが既に新聞やテレビなどで報道されているため，個人が特定される可能性が懸念された。しかしご家族は，「お役に立てるのであれば，どうぞ遠慮なくお書きください」と快く承諾してくださった。心より感謝したい。

最後に，ご家族から頂いた手紙に書かれてあった聖書の一節を記して，稿を閉じる。

鹿が谷川の流れを慕いあえぐように
神よ　私のたましいはあなたを慕い　あえぎます
詩篇四十二篇一節

参考・引用文献

阿部順子：脳外傷者の社会生活を支援するリハビリテーション：中央法規出版，1999
原口三郎：脳外傷　ぼくの頭はどうなったの?!－交通事故などの後遺症に悩む若者たち，明石書店，1999
神田橋條治：精神療法面接のコツ，岩崎学術出版，27－42，1990
脳外傷リハビリテーション研究会：いっしょにがんばろう－脳外傷とどうつきあうか　家庭と職場のためのＱ＆Ａ，脳外傷友の会「みずほ」，1995